

西川伸一の オススメシネマ①

真白の恋 (2016)



上映終了後の主演の佐藤みゆきさんによる舞台あいさつ。
(筆者撮影)

とびきりいい映画を観ると、鑑賞後に形容しがたい感情の高まりに襲われる。このときはやはり、生きてよかつたと思う。たとえば、『シエルブルーの雨傘』(仏・一九六三年)を観た後、三階の映画館から建物の出口へと階段を降りる際には主題歌のメロディを無意識のうちに口ずさんでいた。あの高揚感を味わいたいがた

井景一(福地祐介)が東京から仕事でやってくる。二人はひょんなことから出会うことになり、真白は油井に惹かれていく。

当初、油井は真白の障害には気づかない。「ちょっとおもしろい子だ」くらいの気持ちで、真白に観光案内を願う。実はそれは真白にとつて、人生初のデートだった。そのとき油井と自転車に乗る二人、油井の腰に手をかける。絶妙な瞬間、佐藤の好演が一閃する。油井に「真白ちゃんも撮ってみない」と勧められて、真白は油井のカメラを渡されて油井からレンズを絞る手ほどきを受ける。二人の手が重なる。このシーンには真白の鼓動の高まりが聞こえるようだった。あらぬ方向へ進まないか、他人事ながら心配になった。

あるとき、油井は仕事の打ち合わせ中に、地元スタッフから真白の障害について知らされる。油井は「障害者ってなにをもつてそういうんですか」といきり立つ。油井自身も仕事をめぐって浮いている存在だった。だったら自分も障害者ではないかと。

油井は真白のすべてを受け入れようとする。そして、東京に戻る直前に真白にどこか行きたいところはあるかと最後のデートに誘う。真白

は「東京に行きたい」と答える。「それだけだめだよ」と返す油井に、真白が「障害者だから？」と涙声で尋ねる。油井は無言を貫くほかなかった。

真白の犬の散歩シーンではじまり、それで終わる淡い恋物語である。だが、深い含意が台詞のそこここにこめられている。考えさせられるシーンが多かった。それが説教くさくなく示唆的なのがニクイ。

映画好きからすれば、市内の内川を船で行く油井が、自転車に乗る真白をみつけ声かけするが、橋の下をくぐるたびにときれときれになるシーンは秀逸だ。『旅情』(英・一九五五年)を思い出させる。『旅情』はベニスが舞台だが、内川は「日本のベニス」と言われていることをあとで知った。また、真白が『男はつらいよ 奮闘篇』(一九七一年)のマドンナである榎原るみの役どころとダブってみえた。榎原扮する花子も軽知的障害を抱え、寅さんに恋してしまうのだ。こんな「謎解き」も楽しいかもしれない。

真白の真つ白な恋。立山連峰をはじめ富山の風景も美しい。一食抜いてもぜひ観て！
(三月一日・渋谷アップリンク)

(にしかわ・しんいち/明治大学教授)

舞台は富山県射水市。父の自転車店を手伝う主人公の渋谷真白(佐藤みゆき)には、軽い知的障害がある。その地へフリーカメラマンの油

めに、せっせと映画館に通っているようなものだ。だが、そんな映画にはめったにめぐり合わない。『真白の恋』(坂本欣弘監督)はまさにその一本だった。